

ペルボフオ計画

クリストファン・ロドリゲス・ネーダーウィンスは、とてもいい人だ。これは私の主観だけの意見ではない。あの、ダリル夫妻も認めたほどだ。ダリル夫妻と云えば、ヨーロッパのジュリアニス神父やアジアのウンマル大師、アフリカのカンバラン財団からも一目置かれている存在だ。そんな偉大な人物から太鼓判を押されている人間、クリストファン・ロドリゲス・ネーダーウィンスについて今日はお話しするつもりは毛頭ない。だが、メノフイ段階からクオシヴィーナ曲線までを述べたいと思う。

ケストルゾ大統領はスピーチの名手だ。抑揚のある語り口とバースと独特な洒落で聞き手の集聚力を途切れさせない。アクトナ・ヘナ・ケストルゾと呼ばれる微妙な間の表現もここから生まれた。

そして、何よりも注目したところは、必ず「クリストファン・ロドリゲス・ネーダーウィンス」と叫びスピーチを終わらす事だ。

この言葉で聴衆は、拍手とギョーンズと喝采を送る。

アクトナ・ヘナ・ケストルゾからの「クリストファン・ロドリゲス・ネーダーウィンス」イコール大歓声。この方程式は決して崩れない。いわゆる、チーチエ博士の定理だ。

私はそこからノセ理論を用いペルボフォ計画を思いついた。ペルボフォ計画を語っていく前に、B G K 楽団について述べておいた方が賢明だろう。B G K についてはベーディンに精通しているジョイワ君が詳しい。

彼にインタビューをしてみよう。

ジョイワ君、B G K のペバーゾイルについて聞かせて欲しいのだが。

「B G K 楽団、正しくはB G K ゼノニ交響楽団団長サダニシについてですね」

そう、そのサダニシについてだ。

「サダニシなら、マイケル氏の方がよくご存知でしょう」

いや、私は詳しくない。ペパーゾイルの件も含めてお願いしている。

「なるほど。そこなら私ですね。サダニシはまず、楽器の演奏ができないです」

そうだ、そこが肝だ。なぜ演奏すら出来ないクルタンスモニセなサダニシが楽団の団長になれたのか。

「練習が嫌いだとか、音楽的なセンスがないわけではないんです」

うん。ジュリソス卿ではないな。

「彼は両腕が無いんですよ」

いや、ちよつと待ってくれ。

フィルケスト二月号の表紙を見た記憶だと、彼は両腕があつた筈だが。

「そうです。両腕があります。しかし、彼は無いと言ひ張り、両腕を身体に縛りつけ、両腕が無い人間の生活と同じ生活を送っている」
なるほど。

「食事の時は、脚を使い箸を持ち。握手の際は口付けて挨拶をし、移動は専ら一輪車を使います」
指揮をする時はどうなんだ。アツレではないだろ。

「違います。胴体を鎖で椅子に固定し、両足に一本づつ指揮棒を持ち、口で楽譜をめくり、20人あまりの演奏者を見事にまとめ
ています」

ジョイワ君、ありがとう。

以上がベバーゾイル的ペパーソイル項52の概略だ。

そろそろお気づきではないだろうか。すべてお話ししたわけではないが、この計画の真意を。
ペルポフォ計画とは全く無意味な事であると。

最後に、記しておこう。そして大声で言い放とう。

「クリストファン・ロドリゲス・ネーダーウインス」と。